

News Letter

発行

認定NPO法人子どもシェルターモモ
〒700-0861 岡山市北区清輝橋1丁目2-9
電話・FAX 086-206-2423



CONTENTS

- ・巻頭言 1
- ・インタビュー「人」
岡山市こども総合相談所 所長 2
- ・シェルターネット全国会議 3
- ・平成29年度
ボランティア養成講座終了 3
- ・ルポ・「あてんぼ」探訪記 4・5
- ・「モモの家」通信 6
- ・「おおもと荘通信」 6
- ・「en」通信 7
- ・事務局だより 8

■表紙絵「春眠」内村 暁

巻頭言

法人設立10周年

認定NPO法人子どもシェルターモモ 理事長 東 隆司



NPO法人子どもシェルターモモは、2008年（平成20年）9月27日に設立されましたので、今年でちょうど10年目を迎えます。この間、女子用シェルター「モモの家」のほか、男女の自立援助ホームを開設し、さらに自立援助ホームや養護施設を退所した子どものためのアフターケア事業所「en」を開設して、行き場のない子どもたちに対する支援の幅を広げてきました。

法人設立以後、今日に至るまでの間、資金不足などで施設運営の危機を迎えたこともありましたが、職員、理事の踏ん張りと多くの支援者の支えがあってなんとか10年目を迎えることができました。

これまでに子どもシェルターモモの各ホームで受け入れた子どもは合計132名になります。

現在、女子用援助ホーム「あてんぼ」に6名、男子用援助ホーム「おおもと荘」に3名の子どもを受け入

れています。

この3月には「あてんぼ」に入所している3人の子どもが、高校等を卒業し、就職先も決まりました。

朝早く起きて弁当を準備し、1時間以上かけて列車通学を続けて高校を卒業し、公務員として採用された人、ハローワークの訓練に通って資格を取得し、福祉施設に正採用となった人、希望する公務員に臨時職員として採用された人、皆よく頑張ったと思います。心からおめでとうと言います。

これからもいろんな困難にぶつかると思いますが、その時にはSOSを出して周りのおとなに支援を求めてください。

子どもシェルターモモでは、今年の秋に10年目を記念するイベントを催したいと考え、理事や職員でチームを作り、現在、企画中です。

イベント開催の際には、子どもシェルターモモを支えてくださっている皆様にご案内をしますので、是非とも参加いただけるようお願いします。



岡山市こども総合相談所
所長

山本 忠司 さん

雪花が散る寒い日、平成30年度に開所10周年を迎える岡山市こども総合相談所、山本忠司所長さんにお話を伺うことができました。おとなの生活を支える福祉業務に長く携わられてこれ、現職では7年目ということです。丁寧に言葉を紡がれる様子は、愛情深いお人柄を感じることができました。

生活保護の仕事に長く携わってきました

アルコール依存症で就労ができない保護者の家庭を訪問している時、親の後ろに子どもがいたことを思い出します。なんで昼間の時間に子どもが家にいるのかと感じたこともありました。その当時の子どもが今親になって出会い、貧困の連鎖を実感することがあります。

貧困世帯でも、今と昔はかなり違うように感じます。昔は、家族や近所に祖父母の存在があり、両親に代わり、子どもの世話をするおとながいました。しかし、現在の貧困世帯の多くは核家族であったり、単身世帯であったりします。繋がったり、支え合ったりする力が弱く、子育ての孤立化が顕著にみられるようになってきました。

児童福祉の職員の増員も法改正に組み込まれました。 職員として大切なことは何でしょうか？

児童福祉社が常に1人で約120件の支援にあたっています。集中して関わる必要のある時、見守りで対応する時と、子どもや家庭の状態に応じて業務にあたっています。個別事例においては、地域のケースワーカー、保健師、民生委員、児童委員、学校関係者等々と連携をしながら、共働して子どもを支えています。その経験やスキルを活かして、個別ケースへの指導が適切にできる職員が増えないと、子どもに寄り添ったきめ細やかな対応ができないと考えます。そのため、職員の専門性の向上に力を入れています。資格より、資質や経験が大事と思っています。

子どもに関わる上で大事にしていることは何でしょうか、また地域でできることはありますか？

子どもの権利をしっかりと尊重した関わりをすることです。「なんでこんなことをしたのか」と問題行動を考える時に、その子どもの行動の裏側にある事実や思いを把握していかないといけないと感じています。

健全な子ども期を送るために、最も大事と感じることは、子どもが信頼できるおとなが周りにいることだと思います。親でなくても、地域の人でも、色々な所で出会った人が、おとなになっていく過程においてロールモデルになることが大切だと感じます。

今、力を入れている事業に、里親制度があります。信頼できるおとなが家庭で養育する里親の登録に力を入れています。現在、岡山市の里親の委託率は、12.6パーセントで、全国平均を下回っています。岡山県の歴史から、養護施設が充実していることが背景にあるのかもしれません。是非、地域の方々に里親をしてみようと手をあげていただきたいと思います。長期休暇の時などに家庭的な関わりを体験させる一時里親もあります。

シェルターモモに期待することがありますか？

シェルターモモには、年長児の自立支援で大変お世話になっています。信頼できるおとなの存在として対応していただけることに感謝しています。今後とも末永く連携していただけたらと思っています。

(文責：東りえ)

シェルターネット全国会議 沖縄で開催

平成29年11月4日5日と沖縄県那覇市でシェルターネット全国会議が開かれました。総会は滞りなく進み、役員改選もなされて、組織として確立してきた印象を持ちました。新しくシェルターを立上げたピッピ（埼玉）、つなご（神戸）、また再開を決めたパオ（名古屋）、体制を変えて新たな出発をしたそだちの樹（福岡）などの参加もあり、シェルター運営の難しさも感じました。

運営面での措置費の加算や仕組み自体の問題や、成人年齢の引き下げの影響などを考えると不確定な問題が多く存在しますが、今後の課題として全国的な流れの中で取り組んでいかなければいけないと思いました。

沖縄のシェルターの勢いは素晴らしく、若い理事の弁護士やスタッフの皆さんにより刺激をもらえま



した。沖縄には基地があり、沖縄ならではの課題が多く存在しますが、そこにはあえて触れず、おおらかに会を運営してくださっていると感じました。

スタッフ分科会での琉球大学の本村真先生の「トラウマ反応の基礎知識について」の講座は、モモの理事で精神科医の中野医師が定期的に行ってくださっている研修と重なるところも多く、振り返りを兼ねて中野医師の研修でも紹介し、さらにグレードアップしてモモのシェルターに合わせた研修にいただいただけ有意義でした。PTSDやトラウマに関しては、継続的に研修をする必要性を感じています。

（文責：青野雅世）

平成29年度ボランティア スタッフ養成講座終了

平成29年度のボランティア養成講座は右記のプログラムで行いました。参加者は毎回30名程度でした。

困難を抱えた子どもたちを理解していただくことが援助の第一歩と考えて毎年プログラムを組んでいます。

3年前から、子どもシェルター「モモの家」、男子用自立援助ホーム「おおもと荘」のホーム長から、職員がどんな思いを持って子どもたちと関わっているかを話すプログラムを設けていますが、現場の活動を知っていただくよい機会になっています。

今回、ボランティア登録をされた方は8名でした。

回	日 時	プログラム
1	1月19日(金) 18:30~20:30	「子どもシェルターモモが目指すもの」 東 隆司 さん(子どもシェルターモモ 理事長・弁護士)
2	1月26日(金) 18:30~20:30	「困難を抱えた子どもの理解と援助①～愛着～」 中野 善行 さん(なかのクリニック院長・精神科医)
3	2月2日(金) 18:30~20:30	「困難を抱えた子どもの理解と援助②～非行～」 伊藤 和幸 さん(岡山保護観察所 保護観察官)
4	2月9日(金) 18:30~20:30	「困難を抱えた子どもの理解と援助③～児童養護施設～」 則武 直美 さん(児童養護施設「岡山聖園子供の家」 園長)
5	2月16日(金) 18:30~20:30	「困難を抱えた子どもの理解と援助④～虐待～」 薬師寺 真 さん(津山児童相談所 子ども支援課長)
6	2月23日(金) 18:30~20:30	「子どもシェルター「モモの家」の子どもたちと暮らし」 青野 雅世 さん(子どもシェルター「モモの家」 ホーム長)
7	3月2日(金) 18:30~20:30	「自立援助ホーム「おおもと荘」の子どもたちと暮らし」 土井 一成 さん(自立援助ホーム「おおもと荘」 ホーム長)
8	3月9日(金) 18:30~20:30	「シェアリング&感想」 中野 善行 さん(なかのクリニック院長・精神科医)

受講生の感想

第4回「困難を抱えた子どもの理解と援助③～児童養護施設～」

講師：則武直美(岡山聖園子供の家 園長)

児童養護施設の子どもたちが、自分の親のことや入所の理由などを知らされていないことが多いと知って、ショックでした。自分の家族について必要な情報を正しく知ることが気持ちの整理ができ、自己肯定感につながるということを知りました。

第5回「困難を抱えた子どもの理解と援助④～虐待～」

講師：薬師寺真(津山児童相談所 子ども支援課長)

「今、頑張れない子ども、踏ん張れない子どもを切り捨てない。親も子も一緒に救わないといけない。子どもの命を守るのは警察。子どもの権利を守るのが児童相談所」と言われた言葉が胸に響きました。子どもだけでなく、困っている保護者を守る、問題は何なのかを当事者と一緒に考えることに力を注ぐ、視点を変えるということ納得しました。薬師寺さんの暖かな目線に驚きました。他人事でなく、自分事として寄り添うことを目標にしたいと思いました。

ルポ 探訪記

自立援助ホーム「あてんぽ」

モモでは、平成22年6月に倉敷市茶屋町駅前に民家を借用して女子用自立援助ホーム「茶屋町荘」を開設しましたが、諸事情により平成27年1月に廃止しました。その後、同年10月に、岡山市北区法界院にあるグループホームとして使用されていた建物を借用して、「あてんぽ」を開設しました。

専門家の力を
借りて
ステップUP



うに職員とボランティアは協力して子どもたちの支援をしています。

あてんぽでの生活

起床時間は子どもたちの生活パターンでまちまちです。電車や自転車を乗り継いで、登校する子どもたちは、4時とか5時に起きます。ホームの近くで仕事をしている子どもは7時頃起きるといった具合です。

朝夕の食事は職員が作りますが、昼食は、ホームにいる子は、ストックしてある材料を使って自分で作ります。学校でお弁当が必要な子どもも自分で作り、持っていきます。食事のメニューについては、栄養バランスも大事ですが、何より「おいしい」と食べてくれることを第一に考えて準備をしています。しかし、夕食時に子どもたち全員が揃う日は少ないので、季節の行事を大切に、できるだけみんなで楽しいことを共有できるようにしています。その際は、できるだけたくさんのおとなに出会ってみたいので、理事やボランティア、担当弁護士の参加を呼びかけるようにしています。お正月のお祝い、ひな祭り、夏のバーベキュー、クリスマス、子どもたちの誕生日と、決して豪華ではありませんが、家庭的なぬくもりのある取り組みを心がけています。

「あてんぽ」について

「あてんぽ」は、義務教育終了後から20歳までの諸事情により親元で暮らすことのできない女子専用のホームです。子どもたちは共同生活をしながら、仕事や学校に通い、社会へ巣立つ準備をします。定員数は6名です。子どもたちは約4.5畳の個室が与えられ、トイレ、洗面所、お風呂は共有です。リビングは約18畳あり、広々とくつろげるスペースです。

「あてんぽ」を利用する 子どもたちについて

現在、あてんぽで生活しているのは17歳、18歳の6名で、定員いっぱいです。子どもたちはそれぞれに、一様ではない厳しいものを抱えたまま入所してきます。初めて出会う人ばかりの中で、共同生活に慣れていくスピードはそれぞれ違います。また、通学、アルバイト、求職中と、生活のスタイルも個々人で違うので、自立をしていくスピードも違います。それぞれの歩みに寄り添いながら、安心して安全な場所となるよ



子どもたちのアイドル
金魚のトミカ



岡山南ロータリークラブ青少年奉仕委員会のご招待で、子どもたちと職員でファジアーノ対、横浜FCの観戦をしました。この日は私たちの応援があり、ファジが勝ちました！



こばやしりゅうじ
作業療法士 小林隆司先生
(首都大学東京教授)との出会い

あてんぼの職員たちは、子どもたちが巣立っていくにあたって、「こうなってほしい。」「こうしてほしい。」という思いで、それをつい、ストレートに言葉で伝えていました。しかし、この関わりでは子どもたちにとってはプレッシャーになり、かえって子どもと職員の間には溝が出来てしまいました。「自立が迫っているのに…」「どう導いたらいい…」と、職員の不安は強くなっていました。そうするとホーム全体の雰囲気に落ち着きがなくなり、それも職員の悩みになっていました。

そんな時、昨夏、作業療法士小林隆司先生との出会いがありました。子どもたちへの関わり方について先生に相談する中で、「子どもの特性を知り、子どもの行動の見方を変えてみたらどうか」というアドバイスをもらいました。視覚からの刺激に強い子どもに対しては、口頭で伝えて終わりではなく、リビングにあるボードにメモを貼りつけるなどして伝達の工夫をする、また、毎日継続した取り組みができるようにカレンダーにシールを張ってみてはというアドバイスで、それぞれに取り組みました。加えて、張り出したカレンダーに職員からのコメントも書き込むようにしました。すると、他の子たちも自分のスケジュールや頑張りを確認したいと廊下でカレンダーを貼り出すようになるという現象が起きました。そうした取り組みの中で、不登校気味になっていた子が続けて登校できるようになったり、長期記憶が難しい子が自分の予定を確認できるとで落ち着きははじめ、ホームの雰囲気は次第に落ち着

いてきました。これらの解決方法は、子どもたちは自尊心を傷つけることなく行うことができ、職員は、子どもたち自身が成長する力を持っていることを実感できる方法でとても良い機会になりました。



玄関先の、いってらっしゃいとおかえりの花たち

小林先生から「子どもの成長はスモールステップで見ていきましょう」とアドバイスされたことが、これまでの子どもたちへの関わり方の整理ができ、ステップアップに繋がりました。小林先生との連携は平成29年度で終わりですが、こうした専門家との連携を続けられればと考えています。



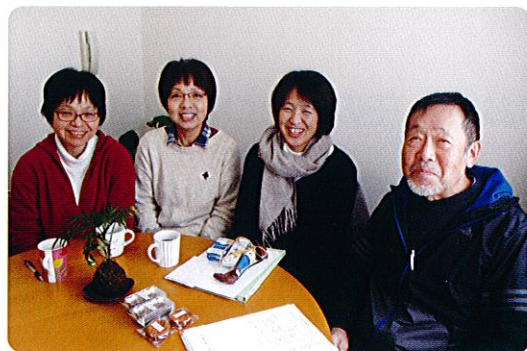
近所のおじさんにいろいろ教えてもらって野菜を育てています。



取材を終えて

3人の職員全員と元ホーム長の白井さんが取材を受けてくださいました。あてんぼに出向いた私たちがまず驚いたのは、家庭的で温かみある工夫が各所に凝らされていることでした。玄関前は季節の花の咲いた鉢植えがたくさん置かれており、玄関を入ると生花が活けてありました。子どもたちが集う食堂兼リビングでも緑の植物や生花、子どもたちが作った手作りの作品も飾られていました。音楽用語「a tempo」から名付けられた「あてんぼ」。奪われていた子どもの成長のてんぼを元に戻し、ゆっくりと自分の力で歩んでほしいという職員の優しい思いが伝わってくる空間と時間でした。

(文責：東 りえ)



あてんぼ職員さんと元ホーム長の白井さん



子どもシェルター通信

「シェルターの仕事って？」

夜勤があって、食事を作って、子どもと共に過ごす。これを聞くだけではシェルターの仕事がどんなものかさっぱりイメージできません。しかも場所は非公表ですから、限られた人しか訪れることがない秘密の場所…。そんな謎だらけの所に、私は来てしまいました（後悔はしていません 笑）。

入ってみると確かに、夜勤があって食事を作って子どもと共に過ごす、というのはその通りなのですが、それは目に見える範囲だけの話で、実際は目に見えず掴みどころのないような業務が多くありました。それは簡単に言葉では表せませんが、例えるなら霧がかかった中で何かを探そうと必死で目を凝らすような感じに私には思えます。そして、見たものをなるべく丁寧に記録して職員間で共有し、ケースバイケースで対応を考えていきます。

これまで過酷な環境で生きてきた子どもたちは、シェルターが安全な場所だからといってすぐに安心して過ごせるわけではなく、むしろ大きな戸惑いや不安の中にいることと思います。そのような子どもたちと関わる中で、できることは何だろうかと考えます。職員が頑張ってもそれが子どもにとって良いかは別で、わかりやすい成果や手応えがあるわけで

もなく、かといって無力感ばかり感じていたらこの仕事は続けられないし…。

では結局、どうすれば良いのだろうか、と自分に問いながらも、ご飯を作って、食べて、掃除洗濯、おはようおやすみを言って、という日常は続きます。今、私ができることをする。それは一見、子どもに何かしてあげたいと思う気持ちの熱量とはかけ離れた、静かで当たり前すぎて見過ごしてしまいそうな事なのですが、その当たり前の一日一日が、長い目で見たときに子どもの未来の一日一日を創っていくのだと思うと、実はとても重要で誇りをもって良いことなのかもしれません。

それが子どもの未来を信じることに become し、今の子どもを力を与えることに become のだと信じて、今日一日の生活を大切にしていきたいです。

（文責 S・Y）



自立援助ホーム

おおもと荘通信

「おおもと荘のひとつの節目」

おおもと荘はゴールではありません。

自立を目標として、学校に通える環境、仕事を続ける環境、お金を貯める手助けはできますが一つ一つの行動を起こすのは自分です。

人と関わり合う中で、おおもと荘でも、社会に出た後でも、周りの意見に納得が出来なければ、納得が出来ないという意思を相手に伝える。

悲しい気持ち、怒りや不満を相手がどの程度理解してくれるのか、それに対して相手はどのような反

応をするのかも一つの経験です。

今年度で高等学校を卒業する子も、周囲の配慮はありつつも、本人の努力・行動があってこそその結果だと思います。

また別の子どもは、入所中に運転免許を取得し、成人を迎え、周囲との関係や様々な困難を乗り越えて、無事におおもと荘を巣立っていきました。

子どもたちの嬉しそうな表情は職員としても日々の支援の活力になっています。

子どもたちには、そうした日々を積み重ねて、挫折しそうなとき、どうしてもやりきれなくなったと

きに助けて欲しいと伝えることのできる人や場所を
みつけて、おおもと荘を巣立って欲しいと思います。

(文責：原嶋梨紗)

29年度 子どもたちとの思い出☆

5月5日 こどもの日

7月15日 歓送迎会

ホームの庭でバーベキューをしました☆

30日 海水浴

竹野浜海水浴場へ行きました☆

10月18日 誕生日会

本人の好きなケーキタルトで
お祝いしました★

12月24日 クリスマス会

ゲームをして盛り上がりました☆

31日 大晦日

1月3日 誕生日会

ホームを出た先輩も参加しました☆

28日 誕生日・送別会

成人の節目をみんなでお祝いしました★

2月3日 節分

ホームの庭で盛大に鬼退治！！

25日 送別会

トランプマジックで盛り上がりました★

3月4日 卒業お祝い会

社会人になる第一歩を卒業生も一緒に
お祝いしました★

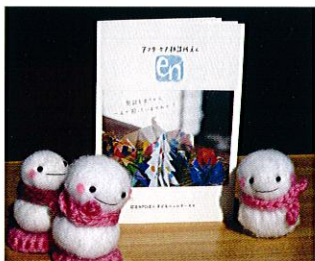


アフターケア

アフターケア「en」通信

en の冊子ができました

赤い羽根共同募金の
助成を受けて、アフ
ターケア相談所「en
(えん)」の冊子を作成
しました。ポケットや
バックに入れやすいコ
ンパクトサイズです。



「おかえり、まってたよ。」と手にした時に、温かみ
を感じるようにデザイン構成され、活動を写真で紹介
しています。冊子は、子どもシェルターモモ事務
所に置いておりますし、福祉関係や、困っている子
どもたちが立ち寄りそうなところに置いていただい
ていますので、皆様も手に取ってみてください。

また、新しい取り組みとして、昨年12月から、
おかずの持ち帰り食堂「モモ食堂」を始めました。
材料費のみ実費をいただき、安価でおかずを提供し
ています。12月はクリスマスも近かったので、手作
りチーズケーキを焼いて、チキンカツ、チキン天ぷら、
マカロニサラダ、ニンジンとツナの炒め物、サツマ
イモの素揚げ6品を1食250円で作りました。さつ
まいもと、ニンジンをたくさん寄付していただいた
ので助かりました。4人のボランティア主婦が2時
間半かけて17食分を作っていると、事前に弁当を注

文していた子どもたちが集まってきて、パック詰め
を手伝ったり、横から味見をする子もいたり大変
にぎやかでした。まるで、お腹がすいた子どもが、「お
母さん今日のご飯何？」と台所に集まってくるよう
な光景でした。

次第に台所は、子どもたちが手伝いをしながら、
自分の近況やら、悩みなどを話す場にもなり、自然
に子ども同士でピアカウンセリングの場になってい
ました。

近頃は、コンビニで簡単に食事は手に入ります。
しかし、作り手の見える台所は、居心地のいい場所
となり、家庭料理は子どもたちにとって、体の栄養
ばかりではなく、心の栄養にもなっているのだと思
いました。

食材はなんでも構いません。少しおすそ分けして
いただけたら嬉しいです。

(文責：東 りえ)



事務局だより

第9回子供達のためのチャリティーコンペで多額のご寄付をいただきました！

県内外で活動する有志・企業が集まり、「自分達で出来る社会貢献を…」をテーマに、特に未来を担う子どもたちをサポートしようと始められたゴルフコンペで、今回で9年目の取り組みです。今回も300,000円のご寄付をいただきました。ご協力いただきましたみなさま、本当にありがとうございました。

赤い羽根共同募金(テーマ募金)

～「地域から孤立をなくそう」ささえあいプロジェクト～で134万円の助成金をいただけることとなりました！

1月1日から2月28日までの2ヶ月間、『赤い羽根共同募金(テーマ募金)～「地域から孤立をなくそう」ささえあいプロジェクト～』に参加しました。この募金は岡山県共同募金会のご協力により、募金額に加算して助成されるというものです。今回は、共同募金会からの加算も加えて1,340,000円の助成金をいただけることとなりました。今回のご寄付では、支援体制強化のため、自立援助ホーム・子どもシェルターの支援を横断的に担える職員1名を確保するための費用として活用させていただきます。ご協力いただきましたみなさま、本当にありがとうございました。

「フードシェアリングジャパン」より食品をいただきました！

吉備中央町を拠点に活動されている「フードシェアリングジャパン」より、スーパーや農家などから出てくる、食べられるのに廃棄されてしまう余剰食品を自立援助ホーム「あてんぼ」にいただきました。

助かっています。沢山いただいたジュースもあっという間になくなってしまったりと、子どもたちもとても喜んでます。ありがとうございます。



編集後記

寒い寒いと思っていましたが、梅の花が咲き桜の蕾も膨らみ春が近づいてきております。不思議なもので毎年迎える春ですが、春は格別うれしいものです。

今回のニュースレターいかがでしょうか。子どもの成長はゆっくりで、少しずつです。しかしそのゆっくりを待ち続けることに喜びを感じ、さらにその先を応援できるこの活動は意味深いと感じております。今後ともご理解、ご支援をお願い申し上げます。(モモボランティア：東 りえ)

●ご寄付は金額の多寡に関わりなく下記へご送金頂ければ幸いです。

郵便振替口座 01370-4-52835 特定非営利活動法人 子どもシェルターモモ

(ご送金の際はお名前・ご住所・ご寄付である旨ご記入いただければ幸いです。)

今年もチャリティー備前焼販売より多額のご寄附をいただきました！



今年も岡山一番街コンコース広場で、若手の備前焼作家の有志の方々「from bizen」によるチャリティー備前焼販売が3月10日(土)に行われました。このイベントは、備前焼作家の藤原和氏の呼びかけにより若手を中心とする有志の作家の方々が作品をチャリティー価格で提供されるもので、今年で7年目の取り組みとなりました。購入代金は、AMDAと子どもシェルターモモの募金箱へ直接入れていただき、売上金全てを寄附して下さるという形をとられています。今年もたくさんの方にお越しいただき、子どもシェルターモモには、208,688円のご寄附をいただきました。

作品を提供くださった作家のみなさま、作品をご購入して下さったみなさま、またボランティアとしてお手伝いいただいたみなさま本当にありがとうございました。

作品を提供くださった作家のみなさま、作品をご購入して下さったみなさま、またボランティアとしてお手伝いいただいたみなさま本当にありがとうございました。

【出品された作家のみなさま(敬称略)】

出井隆	稲井文代	岩本哲也	表崎秀仁
大饗利秀	大石橋宏樹	○久郷剛司	○小橋俊允
小山月泉	榊原啓司	柴岡力	○柴岡久
柴岡宏和	嶋大祐	○高原武	高山茂
高力芳照	○竹内千恵	竹内靖之	○竹崎典泰
竹崎洋子	○辻多恵	豊田賢潔	中本研之
乗松美歩	○馬場隆志	原田圭二	○原田良二
藤原章	○藤原和	藤原喜久代	○藤原賢史
○藤森信太郎	藤森陶志	武用崇	武用務
細川敬弘	○前和臣	松井浩之	○松島健治
松本優作	水上岳正	宮尾昌宏	森和彦
森大雅	○森敏彰	森本直之	屋代剛右
横山直樹	吉延真一	○好本康人	渡邊琢磨

※○印は当日、店頭に立っていただいていた作家の方々です。

イオン黄色いレシートキャンペーンに参加しています

このキャンペーンは、毎月11日に黄色いレシートを、イオンモール岡山の店舗に設置されている専用の投函BOXへ入れると、合計金額の1%が子どもシェルターモモに寄付されるものです。毎月11日にイオンモール岡山でお買い物の際は是非、レシートの投函をお願いいたします。平成29年4月から平成30年2月の間に投函いただいたレシートの合計3,338,730円の1%の33,300円のご寄付をいただけることとなりました。